新医療の創造で世界を牽引する

研究と臨床、地域と医療、いまとこれからをつなぎながら

診療科横断的な組織を設置し、診療・支援体制をさらに充実

本院では、患者さん一人ひとりの多様なニーズに応えるため、診療科の垣根を越えた組織整備を進めています。2025年には「小児・AYAがん支援センター」と「脳神経治療創発センター（CiSNeuro）」を設置しました。小児およびAYA世代（15～39歳）のがん患者さんは、成長・発達の途上や、就学・就労・結婚・妊娠・出産といったライフイベントの時期に治療を受けるため、成人がんとは異なる特有の課題があります。小児・AYAがん支援センターでは、関連診療科や多職種が密接に連携し、診療に加え、心理的・社会的な側面から患者さんとそのご家族を包括的に支援します。CiSNeuroでは、精神科神経科、脳神経内科、脳神経外科などの中枢神経医療の専門家が結集するとともに、脳機能総合研究センターおよび京都大学iPS細胞研究所も参画しています。診療と研究がシームレスに連携する、世界的にも類いまれな集学的なセンター機能を活かし、最先端の治療を迅速かつ安全に患者さんへ届けることを目指します。





CiRA、本院診療科（脳神経内科、脳神経外科、放射線診断科）、iACTなど多くの関係者が連携し、医師主導治験が実施された。

iPS細胞研究の成果を新たな治療選択肢へ

本院では、京都大学iPS細胞研究所と連携し、2018年からiPS細胞由来のドパミン神経前駆細胞を用いたパーキンソン病治療に関する医師主導治験を実施してきました。治験では、安全性と臨床的有益性が示唆され、その成果をもとに開発された「アムシェプリ®」（一般的名称：ラグネプロセル）は、2026年3月、パーキンソン病に対する世界初の再生医療等製品として、製造販売承認（条件及び期限付承認）を取得しました。新たな治療法としての活用が国内外から期待されるとともに、本院が長年推進してきた再生医療研究の社会実装における大きな一歩となりました。本院では、研究成果をいち早く臨床へつなげ、患者さんの希望となる新たな医療を届けることを重要な使命としています。今後も、いまだ有効な治療法が確立されていない病気に対し、iPS細胞を用いた研究をはじめとする革新的な医療開発を推進し、新たな医薬品や治療法を一日でも早く患者さんのもとへ届けられるよう取り組んでいきます。

地域の災害医療を支える拠点として、近畿地方DMATブロック訓練を実施

2025年11月21日・22日の2日間、京都府を被災地と想定した近畿地方DMATブロック訓練が実施されました。本院は京都府災害拠点病院として例年参加していますが、今回は初めて「京都市北部医療圏DMAT活動拠点本部」を設置する病院として選定され、近畿各府県から参集したDMAT隊の指揮・調整を担いました。訓練では、花折断層帯を震源とする最大震度7の地震を想定し、医療機関の被害状況や医療需要の把握、DMAT隊の受入れ・活動指示、物資支援、重症患者の搬送調整、自衛隊ヘリコプターによる搬送などを実施しました。また、院内災害対策訓練も併せて行い、災害対策本部の運用やトリアージ、多数傷病者の受入れなど、一連の災害対応を確認しました。

本院では、災害時にも地域の医療を支える役割を果たせるよう、今後も継続的な訓練と体制整備を進め、災害対応力のさらなる強化に取り組んでいきます。



